主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	伊藤亜聖

主 論 文 題 名：

「世界の工場＝中国」時代の産業集積

―2000 年代の労働集約的産業に注目して―

（内容の要旨）

本論文は、「世界の工場」とまで呼ばれた中国の製造業が、とりわけ 2000 年代後半以降になおも労働集約的製品の領域で高い国際競争力を維持してきたことに注目して、産業集積の視角から分析を加えた。2000 年代初頭の中国製造業の急成長要因に関する先行研究は少なくないが、産業集積と広大な空間の意義については、十分に位置づけられてきたとは言えず、また賃金上昇という変化の下の中国製造業の変動を捉える作業も始まったばかりである。近年では「世界の工場＝中国」の時代は終わるとする見方もあるが、そうだとすればこれまで生産を担ってきた中国の主要産業集積に大きな変化が生じているはずである。本研究は、中国経済という巨大な対象を、「世界の工場＝中国」説を下敷きにしつつ、企業レベルの能力構築でも、産業レベルのキャッチアップでもなく、産業集積と地域・空間の視角から、その全体像をつかもうとする試みである。

第一章では、上記の問題意識と、データからの確認、そして先行研究からの示唆を整理している。中国の労働集約的製品の国際競争力は、賃金が急上昇し始め、一人当たり GDP で他のアジア諸国を越えて以降にも高止まりしてきた。このように、古典的な比較優位論からすればはみ出すような動きが観察されたのはなぜであろうか。データから見ると、2000 年代のこれらの製造業の発展の担い手は沿海部の民営企業であった。更にその背景を考えると、生産がとりわけ集中してきた産業集積に注目することができる。日本の先行研究の蓄積から、マクロな動態的な分析と同時に、個別の産業集積の機能と構造に注目する必要が示唆され、更にこの点に加えて、本研究では中国の大国性と、製造業の変化に格別の注意を払いながら分析を行うとした。

第二章では省レベルの産業シェアの変化の要因を検討することで、マクロな産業立地の変化が 2004 年以降、どのような要因によって生じているかを探った。分析の結果、2000 年代に、労働集約的産業では沿海部よりも中部地域の方が高い成長を見せると同時に、集積地ほど地域産業の成長が高まる傾向も一部観察された。これはつまり、2000 年代の中国国内での産業立地について、中国国内での移転と集積が同時に観察されることを意味し、単なる「産業の移転」や、その逆の「産業の集積」といった、一方的な説明では把握できない、複雑なメカニズムが生じていたことが判明した。こうした変化のミクロな規定要因と特徴については、産業集積の構造や成長メカニズムについて踏み込んだ検討が必要となる。

そこでつづく第三章と第四章では、中国の労働集約的産業の中でも代表的な産業集積の事例分析を行うことで、地方政府の産業政策や企業家の行動にまで踏み込んだ分析を加えた。事例分析の際には産業集積の歴史的発展過程、特徴と機能、企業の行動、中国経済の空間的重層性に特に注目した。

主　論　文　要　旨

第三章では中国東部・汎長江デルタに含まれる、浙江省義烏市の雑貨商工業集積を取り上げた。中国の軽工業領域で最も知られている産業集積が、単なる工業集積ではなく、むしろ商業を全面に押し出している点は、改革開放期の産業集積形成の特徴を考えるうえで示唆に富む。特に卸売市場の開放性やネットワーク、そして生産組織の多様性に注目して分析を加えた結果、品目バラエティや価格の面で競争力を持つ産業集積の形成が、ボトムアップな企業家と地方政府の取り組み、そしてなによりも空間的な重層性のもとで実現したことが明らかになった。興味深い点は、集積地から遠く離れた工場や農村の労働力も活用する生産の仕組みが構築されていた事である。

つづく第四章では、中国南部・珠江デルタに位置する広東省中山市古鎮鎮の照明器具産業集積を取り上げて分析を行った。本事例からは、珠江デルタという産業基盤が、照明器具という多様な素材と部品を必要とする産業の競争力を担保していた点が明らかになり、改めて中国における重層的な経済空間の意味が示された。この分析から、中国の代表的産業集積において、現地政府の積極的な介入のもとで、多様な品種を安価に提供するための供給体制が地理的な広がりとサプライチェーンを背景として形成されたことを明らかとなった。

最後に第五章で本研究の分析を総括した。結論は次の通りである。2000 年代の中国の労働集約的産業の競争力の高止まりは、中国が大国であることを前提として、①沿海部の主要産業集積における供給能力の拡充と、②集積地を基点とした分業範囲の空間的広域化によって生じた。賃金上昇の環境下において、沿海部の主要産業集積は製品バラエティの拡充を、国内の各種関連集積地との産業連関と空間的な重層性を前提として実現していたが、同時により労働集約的な工程な品目については国内で投入コストがより低い地域からの供給が進展していた。沿海部に巨大な産業集積が形成されている状況下で内陸部へと産業が波及するという現象は、産業集積(agglomeration)と工程間分業(fragmentation)の同時発生という意味で、“fragmeration”とも呼べる。中国の長期にわたる工業化の歴史は、内陸部の生産額シェアの高まりという新たな段階に、2000 年代に形成された沿海部の分業関係を拡張・発展させる形で突入しているのである。

こうした展開が労働集約的産業において観察されることから、幅広い品目で高い国際競争力を保つ輸出国としての「世界の工場＝中国」時代は、中国製造業の内部での大きな構造調整と変化を伴うことで、当面維持されると筆者は展望する。しかしこのことは「世界の工場＝中国」が、これまでと同じような産業立地や事業パターンでその地位を維持することを意味しない。むしろ、中国製造業の内部で大幅な構造調整と集積地における対応が取られるからこそ、全体としての幅広い品目での高い国際競争力とシェアが維持されうる。2000 年代後半に胎動しはじめた、担い手、市場、産業立地の変動が 2010 年代に本格化することで、「世界の工場＝中国」は、2000 年代初頭のイメージ――外資主導、人海戦術、来料加工、沿海部集中、先進国市場輸出というバージョン 1.0 の姿から、「世界の工場＝中国 version2.0」とも呼ぶべき状況――すなわち、民営企業主導、生産方式の効率化、部品・素材の現地調達化、中西部への産業立地、更には ASEAN・メコン地域をも含めた産業連関、巨大な国内市場と新興国へのさらなる展開へと変貌を遂げつつ、中国は幅広い品目での国際的に高い競争力とシェアを維持または強化しうる。このような仮説を実際に検証していくことが筆者の今後の研究課題となる。